「自分にできること」

私が初めて福祉について知ったのは、小学四年生の時だった。地域の福祉施設で働く方が福祉学習として、授業をしてくださった。その時、目の不自由な方や高齢者がどれほど大変なのかを実感するため、アイマスクをして行動したり、体に重りをつけたりして、自由に動くことができない状態を疑似体験した私の中では、思ったように行動できず、苦しかったような記憶が残っている。ただ、この体験はいつの間にか、完全に私の中で消えてしまっていた。

中学生になった私は、バスや路面電車といった公共交通機関を使う機会が増えていった。そんなある日、足の不自由な方が路面電車に乗ってきた。そのとき、電車はほぼ満員で、乗るのを諦めて次の電車を待つ方までいるほどであった。そのとき、車内アナウンスで「足の不自由な方が乗られます」という声が車内に響いた。すると、入口のドア付近から座

20 × 20

席に座っている人まで、全員がスペースを作ろうと動いた。私は後方にいたので、その様子がはっきりと見えた。確かに一人一人の小さな行動かもしれないが、確実に思いやる心が車内全体を一つにした。私の心もその時、温かくなった。

その後、私の頭の中に、小学四年生の福祉学習が少しずつよみがえってきた。人は誰しも健康でありたいが、何かしらのサポートが必要になる場合がある。生まれつき、目が不自由であったり、足が不自由だったりする方だけが対象ではない。年を重ねれば、不自由な部分が出てくることもある。また、怪我などで不自由になることもある。誰でも、サポートが必要になる可能性があるのだ。小学四年生の福祉学習で味わった上手く体が動かせない苦しみが、いつ襲ってくるか、分からないのである。

この経験から私は少しでも困っている人がいたら、何か行動を起こそうと考えるように

になった。しかし、行動を起こすことは思いがあっても、なかなか行動できない難しさがあることを経験した。

それは「席を譲ること」である。席を譲る行動を起こす時に、なぜか、緊張してしまうのである。譲る勇気が出ずにいると、何もしないで終わると罪悪感が残ってしまうことは分かっている。だが、勇気を振り絞れない。

「もし断られたらどうしよう」などと思うと一歩が踏み出せない。足が不自由な方が路面電車に乗ってきた時のように、みんなで動くことができるのだろうが、一人だと難しい。思いと行動がかみ合わないのである。

だから私は、自分にできることをしようと考えた。席を譲るのではなく、下車するようにして立ちあがるのだ。そうすれば、誰の目も気にせずに済む。それでいいと思う。行動せずに後悔するより、誰にも気づかれずに行動する。これなら私にでもできる。

20 × 20